

てはからずも奇しき一致を示すのである。本書はこの

間の消息を物語つて充分である以上要約するに本書の

問題をする所は序論第二の最後に氏の示さる「願生淨

土」「莊嚴淨土」の二面がいかに統一されるかに歸するで

あらう。

唯罪惡嚴重の自覺こそ人生最深の問題の祕鑰である。

(東京市神田岩波書店發行 菊版定價貳圓參拾錢)

(K D 生)

佛教學第一研究室報
彙報

□四月三十日午後七時より第七回研究學會を開催す
法然・證空・行觀の念佛定散關係論について

上杉慧岳教授

選擇集によつて定散二善を明かに區別せられた念佛の意義が其後漸次變化して、證空・行觀に至つて念佛の內容が問題の中心となり。定散の思想が念佛自體に含蓄せらるゝにいたる思想史上の經過發展を氏獨自の立場から二時間餘に涉りて批判的な長廣舌をせられた。參會者、教授並に學生多數。

□五月十五日(月)午後七時より第八回研究學會を開催す。

稱名報恩について

稻葉圓成教授

蓮師の稱名報恩說の根據を宗祖に求め且つ蓮師の稱名が必しも報恩のみ取りきつて居ない點について文證等を擧げ、要するに蓮師は、宗祖の思想を發展祖述せし忠實な傳燈者であることを高唱せられた、後茶話會の席上質問應答に隨分こ賑つた。參會者多數。(物部助手)

れを發表して翰苑に問ふべき旨を洩されたり。なは當日は聽衆佐々木學長以下數十名なりき。

□學會例會

五月二十日(金)午後三時より第一研究室學會例會を

第七教室に開く。講師及講題左の如し。

一、「分別論教」に就いて 赤沼智善教授

氏は婆沙論の「分別論者」に付き、之れを諸種の方面より考察し、嚴密に批判せり。而して之が研究發表は載せて佛教研究本號に在り。聽衆五十餘名。

□六月二十五日(水)午後三時より第二研究室學會例會

を第七教室に開く。藤井周慶氏の「スマトラ佛教に就いて」及教授山口益氏「正理學派に于する龍樹の論書」にして、特に山口君は先きに宇井伯壽博士が「印

哲學研究室報

□四月三十日午後七時

感覺なるものに就いて

高木 教授

□五月二十八日午後七時

數論哲學について

藤井默惠教授

□五月三十一日

本日は學生教授等多數嵐山方面へ徒步にて一日の

進めて、龍樹時代に溯り得べく、隨つてその成立は少くとも龍樹當時又はそれ以前ならざるべからざる所以を論證せり。蓋しこれ學界に於ける一大發見にして、そは定めて興味ある結果を齎らすべし。氏は又ニヤーヤ・ストラの原典を充分に考査した上こ

女性宗教

阿部現亮教授

□九月二十九日午後七時

現象學に於ける質科及意味 務臺理作教授

尙本學哲學科教授鈴木弘氏は先年獨逸留學を命ぜられ、哲學、宗教の研究討論に二年有半を彼地におかれ、先學期末無事研覈達成され歸朝された。爾後歸朝講演會を本學講堂に、研學の一端を北海道における夏季大學の講演に、なされたる等、猶學生に對する講義は今秋より開講される筈なれば一同其の風格に接するを鶴首して待つて居る。(達助手)

人文學研究室報

□六月十八日 左の講演ありたり。

鈴 鹿 教授

一、短冊について
來會者十數名あり。教授の所藏にかかる諸大家の短冊について實地にその起源、様式、書體等詳細なる研究を發表せらる。(堂谷助手)

最近佛教研究論文一覽

(大正十四年 自一月
至六月)

(一) 原 典

西藏傳の阿含經に就いて 寺本 姥雅 宗教研究 三七

般若經の諸問題 干瀬 龍祥 同

法華部大觀(下) 本多 日生 倫理講演集三六、三七

般若心經祕鍵末註解題 林田 光禪 密宗學報 一三

現存梵本法華より什譯十如に及ぶ

岡 敦遂 中外日報 一月末

教行信證流通分の研究 梅原 眞隆 親鸞聖人研究四三、四四

無量光如來安樂莊嚴經 伊藤 方鑒 臨濟大學々報 八

般若理趣分と其類本に就いて 大谷 光瑞 大乘 四二、三四

選擇集の著作年代について 井川 宏慶 歷史と地理 五二

教行信證破壞論について 中井 玄道 龍大論叢三〇、三一

歎異鉢の撰者について 梅原 真隆 同 同

和語燈錄三本の比較研究 福城出土墨寶錄

大正一切經 伊藤 方鑒 臨濟大學々報 一

佛教聖典の成立順序に就いて 長井 眞琴 同 二八三

華嚴聖典の價值 龜谷 聖馨 中央佛教 二八四

釋論末書發達史觀 香川 英隆 密教研究 九四

六六